

〔論文〕

向田邦子の感情表現

——『思い出トランプ』を対象に——

水 藤 新 子

- 〈目 次〉
- 1 はじめに
 - 2 分析の対象と定義
 - 3 『思い出トランプ』における感情表現の諸相
 - 4 結論

1 はじめに

私たちは、ある表現——音声でも文字でも様式は問わないが——に接して何らかの感興を覚える。『思い出トランプ』を一読しての印象は「枯れた感じ」であり、「心弾む」ような、「明るい」ものではなかった。こうした印象が主題そのものに左右されるのは勿論だが、表現に負う面も少なくない。「何を」語るかと同様に「どのように」表すかによっても、受け手の印象は大きく変わってくる。表現は一見「結果」で、それ自体もう完成し、読み手が関わる余地はないように思われるが、それは表現主体側から見た場合であって、受容主体側から見れば「入口」である。受容主体は、表現主体の書き綴った一語一句を辿って作品世界に踏み込んでいく。ある作品に接して楽しい気持ちになれたり、悲しい気分になったりしたのなら、そう感じさせるような表現が多々用いられていたのだろう。ただし、それは「楽しい」「悲しい」といった単純な表現で表されるばかりではない。表向きそうとは取れないような書き方でありながら、積もり積もって感情を示していることも少なくない。

『思い出トランプ』から受けた「枯れた感じ」、「明るくなさ」、「弾まなさ」が、果たしてどのような表現の積み重ねによってもたらされたものなのかを見ていきたい。

2 分析の対象と定義

2.1 作品

向田邦子は放送作家・脚本家であり、小説第一作は自作ドラマをノベライズした『寺内貫太郎一家』（サンケイ新聞社出版局1975年刊）であった。

今回分析の対象とする短編集『思い出トランプ』は、「小説新潮」1980年

2月号から1981年2月号にかけて連載された13編から成る⁽¹⁾。そのうち「花の名前」「かわうそ」「犬小屋」の三篇で第83回（1980年上半期）直木賞を受賞した。ほぼ満場一致の受賞で、「この繊細にして精確な筆は日本の短篇小说の典型ともいべきもの」（今日出海）、「抜群の出来上り」（水上勉）、「才筆」（村上元三）、「力量十分の作家である」（五木寛之）等、絶賛に等しい選評を受けた作品は、一般読者にも広く受け容れられることとなる。

テキストは、文藝春秋刊『向田邦子全集〈新版〉』第一巻を用いた。

2.2 「感情」とその表現の定義

ここで扱う「感情」と「感情表現」の定義については、いずれも中村1979/1993に倣った。即ち「感情」は「いわゆる喜・怒・哀・楽よりも広くとらえ、気もちとか心理とかいうことばでさす、ある臨時的な精神状態のほとんどすべてを対象」とするものである。分類についても「喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚」の10類を踏襲した。

さらに、「感情表現」とは「それ自体が感情表現でなくても、それをとおして感情表現ができるもの」とあることを踏まえ、いわゆる直接的な表現ばかりでなく、間接的に感情を表している／読者が感情を読み取れると思われる表現についても、できる限り採ることとした⁽²⁾。

3 『思い出トランプ』における感情表現の諸相

この作品に出現した感情表現の総数は、のべ757例／異なり672例であった。内訳は以下の通りである。

喜： 55/38	怒： 31/26	哀： 40/ 33	怖： 55/47
恥： 8/ 8	好： 71/62	厭： 330/314	昂： 101/81
安： 26/24	驚： 40/39		

《厭》が群を抜いた多さである。この作品集に収められた短編には、いずれも壮年期にさしかかった男女が登場する。青春真っ只中の若人たちは違

い、それなりの人生経験を積んだ世代である以上、明るい将来展望や甘い夢ばかりを胸に抱いているはずもない。要するに何らかのマイナス感情に裏打ちされた表現に傾くであろうことは想像に難くない。

3.1 直接的な表現

直接的な感情表現はのべ394例／異なり350例であった。内訳は以下の通りである。

喜： 40/29	怒： 20/18	哀： 12/ 12	怖： 45/37
恥： 7/ 7	好： 25/21	厭： 139/133	昂： 65/53
安： 18/18	驚： 23/22		

《喜》《好》《安》といった好感情だけで81例/68例、また《昂》の中にも「血沸き肉躍る」のようなプラス側の感情は18例/14例見受けられるが、《厭》には及ばない。

- 1 生きて動いていることが面白くて嬉しくてたまらないというところは、厚子と（かわうそは）同じだ。[喜：「かわうそ」16頁-12行]

「宅次」より九歳年下の妻「厚子」は、「年に似合わぬいたずらっぽいしぐさをすることがある」。「西瓜の種子みたいに小さいが黒光りする目」をいつも動かして、「時代劇のことば使いで、ひょいとおどけて振り向いた」りする姿に、「宅次」はいつかデパートの屋上で見たかわうそを重ねる。

- 2 （かわうそは）厚かましいが憎めない。ずるそうだが目の放せない愛嬌があった。[厭・好：「かわうそ」16-11]

「厚かましい」「ずるそう」はいずれも《厭》に属するが、それを「愛嬌がある」と《好》に属する語で受けているため、とりあえずの印象は好転する。《厭》な面にも《好》を感じていた「宅次」の見方が変わるのは、脳卒中の発作で右半身が不自由となり自宅療養に入ってからだ。

「厚子」は近所で火事があれば「寝巻で空のバケツを叩き、隣り近所を起こして廻り、「宅次」の父の葬儀では「新調の喪服を着て」、「泣きながら笑い出しそう」に見えた。不謹慎な場であればあるほど「はしゃいで」「楽

しそうに見え」る女なのだと思います。これまでも同じ姿が別物と
感じられるようになったのである。

- 3 馴染んでかれこれ一年になるが、何度見ても細い目だなと思う。目
というよりあかざりである。笑うとあかざりが口をあいたよになっ
た。 [厭：「だらだら坂」25-5]

「細い目」にしてもこの比喩はいかがなものか。「庄治」が囲っている「ト
ミ子」の容姿は、はっきりと貶めた描き方をされる。

- 4 はたちという若さと、色が白いだけが取柄のずどんとした大柄な体
である。 [厭：「だらだら坂」26-6]
- 5 大き過ぎ肥り過ぎていた。目が細いせいか表情が無く陰気に見え
た。服装も野暮ったく、受け答えも鈍重だった。

[厭：「だらだら坂」29-16]

そんな若さと不器用さにわざとつけ込んで「庄治」が、

- 6 「俺がくるのが嫌なのか」／(略)／「嫌でないのなら、すこしは笑
ったらどうなんだ」 [厭：「だらだら坂」25-8]

と言った「その次から笑うようになった」ものの、

- 7 口も重いが動作も重いトミ子は、笑い方もぎごちなかった。見映え
のしない平べったい目鼻立ちは、笑うことを億劫がっているように
見えた。 [厭：「だらだら坂」26-2]

それでも「庄治」が「トミ子」を気に入っているのは、「いい格好をしな
くて済んだし、体裁をつくることもいらなかった」からだ。「電気通信学校
卒の叩き上げ」で、一代で中小企業とはいえ社長となった「庄治」は、妻も
子供たちも自分の垢抜けなさを馬鹿にしていると感じていた。

- 8 帰って来た父親を見つけ、(娘の律子が)おどけて挙手の礼をしてい
る。いささかだらしない敬礼である。 [厭：「はめころし窓」42-13]

体格が良く美しく、使用人と間違いを起こして父を苦しめた母によく似た
「律子」が急に実家へ戻って来て、「江口は嫌な予感がした」。

- 9 (妻の) ちょっとした目ませや、わざと選んでいるらしい明るい話

題も、江口の癪にさわった。[怒：「はめ殺し窓」53-7]

娘が帰ってきた事情を「自分だけが知っている」ことに優越感を覚えているような妻「美津子」の姿に覚える不愉快である。

10 半沢は、半年の間に多門が瘦せたのが気になった。

[怖：「三枚肉」67-12]

11 見舞いにゆくと、多門はまるで自分のことのように、二人の成行きを心配し、半沢の優柔不断を責めた。[怖：「三枚肉」69-12]

体調を崩していたり、結婚を反対されていたりする友人への気遣い、おそれは《怖》の感情に区分される。

12 (花に) 関心のうすい男と暮すことは、二十歳になった常子にはさびしいことだった。[哀：「花の名前」189-4]

13 女の癖に(骨太で)骨壺ふたつなんて恥しいわね。

[恥：「男眉」114-4]

14 父親にそう言われたのか、京子が、九鬼本に気に入られようとして、精いっぱい気を遣っているのが辛くなった]

[好：「酸っぱい家族」166-8]

15 まあいいさ。鼠(と仇名される自分に)だって血沸き肉躍るときがあるんだ。[昂：「だ」34-8]

16 あの小さくて冷たい赤いりんごが、あの晩、姉と弟を安らかに眠らせてくれたことだけは本当である。[安：「りんごの皮」149-4]

17 塩沢は女房と顔を見合わせた。[驚：「ダウト」207-7]

「さびしい」, 「恥しい」, 「安らか」は字義通りに, 「気に入」る, 「血沸き肉躍る」, 「顔を見合わせる」も慣用的に個々の感情を表す。いずれも誤解なく読み取ることができる例である。

3.2 間接的な表現

前述の通り、感情というものはいつも直接的に出現するとは限らない。たとえば悲しみは「胸が張り裂けそう」、嫌悪感「むかつく」、緊張や不安は

「ドキドキ」等と間接的に表されるが、これらはすべて「感情」を「感覚」へと置き換えた表現である。

一般に「感覚表現」という用語は、感覚の言語化と、感覚的把握との両義で用いられている。前者はいわゆる五感——実際の身体感覚を言語化した表現であり（例「刺すような痛み」）、後者は心理状態や認識の対象を感覚的に捉えた表現（例「心が痛む」）である。

上記の例はいずれも比喩表現だが、感覚的把握にはオノマトペを用いた表現も含まれる。痛みを例に採れば、「きりきり」なのか「じんじん」なのか、或いは「ずきずき」なのかによって、その「感じ取り方／感じられ方」は全く別のものとなってくる。

また、「硬い声」のように、ある感覚を表すのに別のある感覚を表す語を借用してくる表現があり、共感覚表現（共感覚メタファ、共感覚比喩）と呼ばれる。「硬い声」の場合、触覚を表す「硬い」が聴覚の領域に転移して用いられたと考える。

『思い出トランプ』に出現する感覚表現は、のべ548例／異なり482例に上った。このうち、間接的な感情表現はのべ363例／異なり322例であった。内訳は以下の通りである。

喜： 14/ 8	怒： 11/ 8	哀： 28/ 21	怖： 10/10
恥： 1/ 1	好： 46/41	厭： 191/181	昂： 37/29
安： 8/ 6	驚： 17/17		

3.2.1 オノマトペ

いわゆる擬音（声）語・擬態語を広くオノマトペと一括し、品詞の違いについては問わないものとする。オノマトペを用いた表現は144例／111例、うち間接的な感情表現は105例／73例で、それぞれ全体の72.9％／65.8％に当たる。

18 一番いいところを、あっちに廻しているようでムツとなった。

[怒：「ダウト」205-5]

18' 一番いいところを、あっちに廻しているようで腹が立った。

19 (娘の結婚が決まって) 一番ほっとしたのは母親の美津子より江口だった。[安:「はめ殺し窓」51-5]

19' (娘の結婚が決まって) 一番安心したのは母親の美津子より江口だった。

18は18'のように、19は19'のように表現すればよいところだがオノマトペを用いている。直接的に感情を表す表現を用いず音象徴を用いた語に置き換えることで、読み手により感覚的に受け止められ理解されることを期待しての選択と考えられる。

20 半年ぶりの煙草だったせいか、それともまた熱でも出たのか、頭がくらくらした。[昂:「耳」180-10]

20' 半年ぶりの煙草だったせいか、それともまた熱でも出たのか、めまいがした。

20は20'のように書き換えられるし、そうしないまでもやはりそれ以外の意味に誤解されることはまずない。身体的事実をただ伝えるなら不調を表す「めまい」で十分だが、「くらくら」を充てることでその不調は実際どのようなものが具体化する。「くらくら」は何か揺れる、それも一度でなく連続して、左右に行き来するというよりは円を描いて廻るさまをいう。久し振りに摂取したニコチンが脳にもたらす作用は「めまい」という現象名で呼ぶよりも「くらくら」と動きで示した方がぐっと身近になる。さらに言えば、これはゆっくりと湯が沸き立つさまにも用いられる。自身の脳内から忘れていた反応が湧き上がる感覚をも再現していると見るのは、少しうがち過ぎだろうか。

オノマトペを用いるのは語彙選択としては間接的だが、その真意が18'や19'、また20'であると誤解することはまずない。その点で直接的な表現と実質的差はない。ここで問題にしたいのは次のような例だ。

21 (トミ子の家では) そのへんの惣菜屋で買ってきた薄い豚カツにソースをじゃぶじゃぶかけて食べ、夕刊を三面記事から先に読んで構わ

なかった。[喜：「だらだら坂」31-10]

「じゃぶじゃぶ」は大雨にも庭の水やりにも当てはまり、それだけなら単に盛大で過剰な水のありさまを指す。食べ終わった後皿に余るほどの調味料となると、行儀が悪いとされ周囲も嫌悪を催す。中小企業とはいえ社長の座に収まった「庄治」の家庭でも妻や子供たちから鬻鬻を買ってしまう下品さが、彼にとっては禁断の楽しみなのだ。従ってここは、

21' ソースをけちることなく好きなだけ／好き放題かけて食べ、夕刊を三面記事から先に読んでも構わなかった。

とでも書き換えることができよう。ただ、21'の場合「庄治」の望む「好きなだけ／好き放題」の程度がいかほどのものかまでは伝わらない。食後の皿に溜まるソースは、家族でなくとも好意的に受け取られそうにない。周囲の受ける《厭》な印象は、「じゃぶじゃぶ」を用いたからこそ伝わるのだろう。

22 (お地藏さまは)「そうかそうか。可哀そうに可哀そうに」／と口先だけで、すこしたつとケロリと忘れて居眠りをしているような気がする。[厭：「男眉」118-9]

幼い頃から濃い眉を祖母に「男眉」と厭われ毛抜きで抜かれていた「麻」は、自分とは逆に「地藏眉」と称される優しい眉を持つ妹にいい気持ちをもっていない。そのせいか、慈愛に溢れているとされる「お地藏さま」も優しいのはそのことばかりで、実は誠意がないのではと勘繰るほどだ。

22' 口先だけで、すこしたつと薄情にも忘れて居眠りをしているような気がする。

「薄情」は文字通り「情の薄い」心根を言うが、どのようにと問われるとまた別の形容詞が必要となる。「ケロリ」は「何事もなかったように平然としているさま」、しかも「状態が前とはすっかり変わったりするさま」を言う。「可哀そうに可哀そうに」と「口先だけで」言うのは「薄情」だが、「ケロリ」がつくと言ったそばからもう忘れて平然としている様子までもが伝わってくるようだ。

18, 19また20とは異なり、21, 22はともに語彙選択が間接的なばかりでな

く、当該オノマトペを用いて表したい真意が辞書的な意味からは飛躍している。その点で、さらに間接的な表現となっていると考えられる例である。

23 耳の下で水枕が**プカンブカン**と音を立てている。／氷は疾うに解けている。／頭を動かすたびに、なまぬくい水がふなべりを叩く波のように鼓膜に伝わってくる。熱は下がったらしい。[好：「耳」169-1]

これまで見てきたものたちとは違い、「プカンブカン」は辞書登録がない。「ぷかぷか」を構成している要素（形態素）の前項・後項にそれぞれ「り」を添えた「XrXr」形式の「ぷかりぷかり」は収められている辞書もあるので、同様の発想で撥音を添えた「XnXn」形式を造語したものでらう。

「ぷかぷか」、「ぷかりぷかり」はともに何かの水に浮き、あるいは軽快に流れるさまを指す。「一り」と「一ん」の印象を峻別するのは困難を極めるが、例えば「くるくる」を元にした「くるりくるり」と「くるんくるん」を比較した場合、「一り」はより連続性を、「一ん」はより回転性を志向する場面で用いられる傾向が強い。後者の方が動きそのものを強調すると言い換えてもよいだろう。口を金具で留めて水と水を閉じ込めた水枕は、何か水面を漂う拡がりや流れて行く先を持たない閉じた空間である。解けた水の分嵩を増した水が、載せた頭の動きに合わせてあちらこちらへ行きつ戻りつするさまを描くには、既成の「ぷかぷか」や「ぷかりぷかり」ではふさわしくないと感じられたのではないか。

24 けば立っているのは縁側だけではなかった。ガラス戸の棧も柱も畳も、いや母の手や足の踵までも白くささくれ立っていた。母に絹ものを着せてもらうと、(荒れた手指に)引かかって**シャガシャガ**と音を立てた。[厭：「男眉」108-13]

手荒れの激しい母が我が子に絹物を着せ掛けようとする時、手指の「ささくれ」にいちいち引かかり音が立った記憶である。「シャガシャガ」は目新しい印象を与えるが、これも既成の語「しゃかしゃか」の後項を濁音化させた造語である⁽³⁾。

「しゃかしゃか」は小さいものが触れ合ったときに立てる乾いて硬質な音

を表すが、「一が」と濁らせることで不快感・抵抗感が増し、滑らかさがなく耳障りな、《厭》な音になる。絹物と言えばいずれ晴れ着の類、滅多に袖を通すことのないおめでたく誇らしい気持ちを纏う着物と場面には、はっきりと不釣合いな表現である。かつて多くの母親たちが置かれた生活環境、そして子供には窺い知れない胸の屈託までもが、「しゃがしゃが」という音の記憶とともにうっすらと甦り、読者の母の記憶をも呼び覚ますのではないか。

3.2.2 比喩表現

比喩表現は380例／355例あり、うち間接的な感情表現は284例／221例で、それぞれ全体の74.7％／62.3％に相当する。

3.2.2.1 直喩・隠喩

次項で扱う共感覚表現に対し、一般的な比喩表現という意味合いで、直喩・隠喩の項を設ける。内訳は直喩が159例／140例、うち間接的な感情表現が113／99あった。そして隠喩は153例／135例、うち間接的な感情表現が103／90であった。

25 西瓜の種子みたいに小さいが黒光りする目が、自分の趣向を面白がって躍っている [?・昂：「かわうそ」11-12]

25' 碁石／黒曜石／黒ダイヤモンドみたいに小さいが黒光りする目が、

「小さいが黒光りする目」であれば、25'のようなもの、それ自体に美的価値を認められる喩詞が浮かぶ。女性なら尚更であろう。ところがここで実際に用いられる「西瓜の種子」は、みずみずしく赤い果肉の中に埋もれていて、かぶりつくたびに口の中に紛れ込む邪魔もので、食べながら吹き捨てられる程度の存在である。読者自身がこのように喩えられたとしたら、《厭》な気持ちになるのではないか。それなりの愛情を抱いてともに過ごしてきた妻に対して、全く美化されないこのような喩詞が出てくるのは異例であろう。但しこの妻は、病で倒れた夫をあっさりと裏切り、悪びれる様子も見せ

ない。

「西瓜の種子みたい」な目の輝きは、この喩詞自体が《厭》に属しはしないものの、結末に至って読者を慄然とさせる一句となるのではないか。

26 ひとりで茶の間に坐っていると、家中の壁や押し入れが、しめし合せて隠しごとをしているように思える。〔厭：「耳」172-15〕

26' ひとりで茶の間に坐っていると、見知らぬ他人の家に来ているかのように思える。

熱を出し仕事を休んだ「楠」は、妻も娘もない家の中で居心地の悪さを感じる。平日の昼間にひとり過ごすことなどないせいか、自宅が自宅のように思えないのだ。その違和感をごく単純に喩えれば26'のようになろうが、「壁や押し入れが、しめし合せて隠しごとをしている」と擬人法を用いたことで、体調が悪いときしばしば感じる説明のできない心細さや不安、読者にもおぼえがあるであろう《厭》な感じが、家自体が悪意を抱いているかのように生々しく描かれている。

27 沓脱の石の上で細い煙を上げている煙草を拾った。手袋をはめたまま物を掴むような厚ぼったい感じがすこし気になった。

〔厭：「かわうそ」11-10〕

脳卒中の発作を起こした「宅次」が、あれも前兆だったかと回想する場面である。いつものように縁側で一服していたところ、「指先に挟んだ煙草」が「ふっと風にもってゆかれた」感じで手を離れ、落ちたのだ。

27' 沓脱の石の上で細い煙を上げている煙草を拾った。指先の感覚がいつもよりも鈍っているようで、すこし気になった。

直接的に表現するなら「麻痺している」だが、少し和らげて上記のように「鈍い」「弱い」などを用いてもよいだろう。いずれも感覚そのものの程度が通常よりも劣っているさまを言う。それに対し27「厚ぼったい」は、感覚そのものの程度を示していない。「手袋をはめたまま」の指先が、その厚みだけ触覚の対象から隔てられる状態を表すのである。遮蔽物があるせいで直接ふれられない、この1枚のせいで隔てられる、遠ざけられる感じとでも言い

換えられようか。「隔靴搔痒」という四字熟語がある。思い通りにいかない歯がゆさ、じれったさ、《厭》な感じが伝わってくる場面である。

3.2.2.2 共感覚表現

いわゆる共感覚表現は68例／62例あり、うち39例／32例が間接的な感情表現であった。オノマトペの併用、隠喩との区別、文脈比喻との関係等再考を要する。

28 (瀬戸の蓋物は)牛乳色の濁った白に、あたたかい朱の線が一本、クレヨンで筋を引いたようにぼんやりと入っている。

[好：「男眉」110-14]

白磁の蓋物に引かれた朱の線、その色合いを「あたたかい」と感じる。色彩学では「暖色」「寒色」という区切りがあり、前者は赤、橙、黄など、後者は青系統の色を指す。いずれも色彩という視覚刺激が温度という触覚刺激に置き換えられており、これもそれに則って違和感なく受け止められる例となっている。これを書き換えるなら、どう表現すればよいだろうか。

温度を表す言い方は複数あるが、高い方から低い方へ向かって「あつ(暑／熱)い」、「あたた(暖／温)かい」、「ぬくぬく」、「ちょうどよい／適温」、「つめたい」、「ひえる」、「ひえびえ」、「さむい」などが挙げられよう。目は外界に開いた感覚器なので、風や何らかの気体、液体が直接ふれて温度を感知することもあるが、ここでは実際の温度を体感しているわけではない。瀬戸物に引かれた「朱の線」を、好ましいものとして感受していると言うのである。

28' 牛乳色の濁った白に、目に心地よい朱の線が一本、クレヨンで筋を引いたようにぼんやりと入っている。

好ましさを快い温度に置き換えることで、そのものを見て覚えるものが単なる好悪に留まらず、快い雰囲気、気配、ひいてはそれが演出する使い心地、それが置かれている場の居心地にまで及ぶことが理解される。28'ではその点ことば足らずだが、これ以上の代替案を思い浮かべるのは難しい。あ

りふれた感覚によって、何よりも雄弁に感情を代弁している例であろう。

29 「そのへんて、どのへんですか」／女房は尖った声で言い添えた。
／「うちの庭は嫌ですよ」[怒：「酸っぱい家族」155-5]

29' 女房が不機嫌さを隠さない声で言い添えた。

さして個性的な例ではないが、書き換え例で済むところをわざわざ「尖った声」としている点に注目したい。声は音声すなわち聴覚刺激だが、それを「尖った」形状、またはそれが肌に当たる感覚——痛覚に近いと予想される刺激で写し取る。それぞれ視覚的、触覚的な置き換えである。

30 アパートの郵便受に邪慳な音で朝刊が差し込まれる。

[厭：「マンハッタン」76-3]

30' アパートの郵便受に乱暴な音で朝刊が差し込まれる。

29と同じく聴覚刺激で、こちらは毎朝新聞が届くときに響く物音の例だ。スチール製のドアに作りつけられた「郵便受」に、折り畳まれた新聞を差し込む仕草はそのまます音となる。何軒も担当している配達人のこと、一軒一軒丁寧に、狭いアパートのすぐドア向こうでまだ眠っている人もいるかもしれないなどと配慮するはずもない。「乱暴」と「邪慳」は似ているが、前者は粗雑で荒々しい、後者は思いやりがなく無慈悲、意地悪でむごい意であり、後者の方がより内面的な要素が強い。毎朝《厭》な思いをさせるのは音というよりも、それを立てる誰かなのだ。

31 ひとりで茶の間に坐っていると、軀の芯のところから、ふつふつと湯がたぎるように（気持ちが）たかぶってくる。

[怒：「花の名前」11-12]

夫「松男」に女がいた。昼日中の電話でホテルに呼び出しておきながら黙っている女に業を煮やし、「去年銀婚式を迎え」、「就職、結婚をひかえた子供がい」て、「うちと外は別に考えて」いる旨「常子」は話したが、「つわ子」と名乗る女は「あたし、馬鹿で有名なんですよ」と「人の好きそうな顔で笑」い、むしろ「常子」は「こわい」と感じる。

家に帰ると夫への腹立ちが募ってきた。「ふつふつと」、「湯がたぎるよう

に」は併せてよく用いられ、前者は「沸々と」、後者は「沸る」と同じ字で煮え立つさまを言う。

感情という抽象体はしばしば液体という実体に例えられる。「喜びが溢れる」や「悲しみに沈む」など慣用化したものも多い。31でも鎮まっていた気持ちを水と見做し、熱を帯びていく様子が動的に段階的に描かれている。

31' ひとりで茶の間に坐っていると、軀の芯のところから、次第に松男への怒りがこみ上げて、落ち着いていられない。

「首席になることを親に言われて大きくな」り、花の名前も知らない「俺は不具^{かたわ}だな」と自嘲した相手に、「結婚したら、花を習ってください。ほくに教えてください」と言われて結婚を決めた。「花の名も、魚の名も、野菜の名も」事あるごとに教え、それが出世にも少しは役立ち、「お前のおかげだ」と「畳に手をついた」夫が、もの知らずを恥じない玄人女に手を出していた。「まさかとやっぱり」が最初の感想だったが、二十五年という月日を連れ添った相手である。それ以外にも、忌々しい、情けない、悲しい、切ない、恥ずかしい——さまざまな思いが緋い交ぜになるのが普通だろう。30'のように「怒り」の一語で括ってしまっはとでも足りない、と思わせる一節である。

32 道で「行き止り」というのがある。／あれは変圧器でも入っているのか、金属でできた人間一人やっと入れるほどの小さな小屋があって、「危険」、「触ワルベカラズ」と赤い字で書いてある。／弟の中耳炎は、楠にとって、これから先は「行き止り」であり「危険」であった。〔怖：「耳」171-5〕

熱で会社を休んだ「楠」は、うつらうつらしながら子供の頃を思い出す。口金が緩んだ氷枕からもれた水で「中耳炎になったら大変だ」と言われたが、実際に中耳炎になったのは弟「真二郎」で、こじらせて片耳が難聴になった。そこから「行き止り」の表示を思い出すのは、弟の耳を悪くした一因は自分にあるのではないかという、はっきりしない疚しさのせいである。

32' 弟の中耳炎は、楠にとって、これ以上思い出してはならない不穩

な記憶であった。

同じ頃、隣の女の子が耳にできたイボがとれるようにと根元に赤い絹糸を巻いていた。その耳をさわりたい、糸を引っ張って泣かせたい、やわらかく噛んでみたい——そんな気持ちに任せて、弟の耳にマッチを近づけたようなおぼえがある。「火のついたように泣」いた真二郎を前に、覗きたかったのは女の子の耳なのにと呆然とした。

曖昧な記憶を辿ろうとすると、「行き止り」の表示が浮かび上がる。突き止めたいが怖いという思いが、赤い文字に姿を変えて現れるのだろう。壮年期にさしかかった今も抱えている罪悪感——胸の奥深くにしまい込まれた不安が、際立った視覚刺激となって感知されるこのくぐり、読む者の目と心にも不穏な鮮やかさを残すのである。

4 結論と今後の課題

これまで見てきたように、『思い出トランプ』には、直接的／間接的を問わず感情表現が多数出現する。殊に高い割合を占めるのは《厭》であった。冒頭述べたようにそれぞれの主題を裏切らない、ほぼ予想通りの結果となり、これは直感的な読後の印象とも一致する。

直接的表現／間接的表現の比率はほぼ同じで、特に偏りは見られなかった。また、間接的表現であっても比較的常識の範囲内に収まるような、既視感を覚えるものの比率が高いと感じられる。素直といえば素直、捻りがないといえば捻りがない書き様であることに少し驚かされた。連載当初から絶賛され、受けるべくして受けた直木賞という前知識に照らし合わせてしまうせいか、いささか拍子抜けの感があったが、わかりやすさも評価されて然るべき点ではあろう。

間接的な表現については、共感覚表現を中心に見直す必要がある。「誰の」感情なのか——語り手なのか登場人物なのか、あるいは読者なのか取り違えそうになる表現が一部見受けられる。また、楽しそうな人物を見て不愉快を

覚えるような、いわば揺れ／ブレを示す用例については、視点も考慮し直さなくてはならない。「嫌な感じ」は肉体的で直接的なものが契機になるのか、心理的で間接的なものに起因するのか、その点についてもさらなる調査が必要である。

当然ではあるが、所収された作品によって出現の多寡はあり、表現の方法や質にも差異がある。そこまで整理を進めたい。さらにこの作者の別の作品についても調査を行う必要があるだろう。ドラマ脚本と小説の両方が書かれている作品があれば、脚本の台詞・ト書き・ナレーション、またノベライズされた側の地の文に割り振られた感情表現を整理したい。

論者がかねてより研究対象としている幸田文は、特に感覚表現・感情表現の豊かさに特色がある書き手である。こちらの作品に出現する多彩な用例との比較対照を行い、二者の類似点また相違点を洗い出す作業を通して、向田邦子という書き手の「個性」を明らかにしていくことも、今後に向けた一つの課題と考えている。

【注】

(1) 初出は以下の通り。

「かわうそ」	「小説新潮」	1980 (昭和55) 年	5 月号
「だらだら坂」	〃	〃	8 月号
「はめ殺し窓」	〃	〃	12月号
「三枚肉」	〃	〃	11月号
「マンハッタン」	〃	〃	10月号
「犬小屋」	〃	〃	6 月号
「男眉」	〃	〃	3 月号
「大根の月」	〃	〃	7 月号
「りんごの皮」	〃	〃	2 月号
「酸っぱい家族」	〃	〃	9 月号
「耳」(原題「綿ごみ」)	〃	1981 (昭和56) 年	1 月号
「花の名前」	〃	1980 (昭和55) 年	4 月号
「ダウト」	〃	1981 (昭和56) 年	2 月号

巻末に、「上梓にあたり順番は題名に因んで十三枚のカードをシャッフルしました」との筆者自身による注記がある。

- (2) 拙稿「幸田文『鳩』の文体—間接的に感情を表す感覚表現に注目して—」(『早稲田日本語研究』第15号 2006年3月刊) 参照。
- (3) 参考文献5によれば、「しゃがしゃが」は群馬の方言で萎縮して元気がないさまを表し、「親のあとを一ついて行く」のようにも用いるとのこと。

【参考文献】

- 1 浅野鶴子編 (1978) 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店
- 2 阿刀田稔子・星野和子 (1995) 『擬音語・擬態語使い方辞典』 創拓社
- 3 天沼寧編 (1974) 『擬音語・擬態語辞典』 東京堂出版
- 4 池上嘉彦 (1975) 『意味論』 大修館書店
- 5 小野正弘 (2007) 『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』 小学館
- 6 小島孝三郎 (1972) 『現代文学とオノマトペ』 桜楓社
- 7 多門靖容 (2014) 『比喩論』 風間書房
- 8 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京堂出版
- 9 中里理子 (2017) 『オノマトペの語義変化研究』 勉誠社
- 10 中村明 (1977) 『比喩表現の理論と分類』 (国立国語研究所報告57) 秀英出版
- 11 中村明 (1977/1995) 『比喩表現辞典』 角川書店
- 12 中村明 (1979) 『感情表現辞典』 六興出版 (後に中村明編 (1993) 『感情表現辞典』 東京堂出版へ)
- 13 中村明 (1991) 『日本語レトリックの体系—文体のなかにある表現技法のひろがり』 岩波書店
- 14 中村明編 (1993) 『感覚表現辞典』 東京堂出版
- 15 中村明 (2010) 『文体論の展開—文藝への言語的アプローチ』 明治書院
- 16 鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』 くろしお出版
- 17 半沢幹一 (2011) 『向田邦子の比喩トランプ』 (新典社新書) 新典社
- 18 半沢幹一 (2016) 『向田邦子の思い込みトランプ』 (新典社新書) 新典社
- 19 半沢幹一 (2016) 『言語表現喩像論』 おうふう
- 20 山口仲美監修 (2003) 『暮らしのことはば 擬音・擬態語辞典』 講談社
- *
- 21 川本三郎 (2008) 『向田邦子と昭和の東京』 (新潮新書) 新潮社
- 22 久世光彦 (2009) 『向田邦子との二十年』 (ちくま文庫) 筑摩書房
- 23 小林竜雄 (2009) 『久世光彦 VS 向田邦子』 (朝日新書) 朝日出版社